

火進上(下司町)

むかしから昭和十八年ごろまで、八月二十三日の日野山祭りには、下司の子供たちみんなで火進上を楽しんでいた。

この日は遊び日というて、田の手伝いも、子守りも何もしなくてよく、火を進上して山の神さまの怒りをしずめ、豊作をお祈りしたという。

(祭りの準備 その一)

子供たちは、朝から何かといそがしかった。魚を取るヤスを八番線という太い針金で作ったり、古いヤスの先をといだり、こまこまと準備に余念がなかった。

十べえは、なすびときゅうりをこっそり持ち出した。ごん助はおつ母に内しよで南瓜を持ち出した。一番年上の清松つあんのおつ母は、五月いも

(じゃがいも)をぎょうさんくれた。

ぼんち(ぼつちゃん)のおつ母さんは大きな鉄なべをいくつも蔵から出してくれた。

昼めしを食べ終わると、子供たちは手に手に祭りにつかう野菜を持って集まった。

大きな鉄なべのつるに棒をさして信さんと伝ぎはんが荷のうた。しょうゆ・塩・ながたん(包丁)・板・針金など、みんなで手分けして持つと豆田橋

を渡つて、石に作場道と書かれた細い野道を日野川の河原へと急いだ。

河原に着くとすぐ、

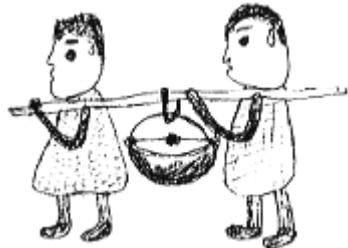
「ワーツ。」

と歓声をあげて、吉野瀬川の伏流水がどぼんとた

まっているきれいな水の所へ、持ってきた野菜を

みんなきてあげた。

小さい子供たちは野菜を洗つた。



「なあんだ、もたもたしてるんや、はよ洗わんか。」
いけいもん（大きい人）の言うことを聞かなおこ
られるさけ、競争で洗うた。おとさんやおしずさ
んは、ながたん（包丁）で野菜を切ると鉄なべの
中へ何もかも入れた。

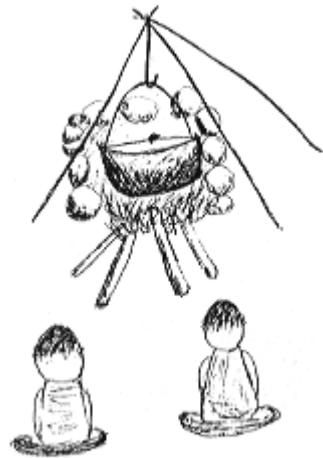
はじき豆（枝豆）は、あぜでこいできたまま葉
だけ取って洗った。

（祭りの準備 その二）

むかしの河原は砂ばっかりのところと、大きな
玉石がごろごろしているところがあつた。砂場へ
大きな玉石を拾うてきて、いろいろを四つ作つた。
長太はんと鶴さんは八番線を折り曲げて、おか
ぎさま（なべをかけるかぎ）を作つた。

田八つつあんと伝ぎはんは、真竹でさんまたを
作つておかぎさまをつるし、野菜の入つた大きな
鉄なべをかけた。

清松つつあんは、みんなに、



「おめえら、河原へ行つてたくもん（たきぎ）拾
うてこい。」
と云つて落ちつてゐる流木や枝を拾つてこさせた。
火をつけた。パチツパチツとよう燃えた。

（祭りの準備 その三）

むかしの堤防は真竹が一ぱい生えていて、かや
やすすぎが生い茂つていた。清松つつあんや重左
はんは、二メートルぐらいの長さに真竹をぎよう

さん(たくさん)切ってきて、

「夜、たいまつに火つけて持って帰るんにやで、

おめえらこの竹ちよつと持ってよま。」

と言って、竹の先の麻木をまき、その上へわらを
しつかり縄でまいて火を付けても、早よう燃えん
ような、たいまつをみんなに作ってやった。

みんなの手に一本ずつたいまつができた。

(遊び その一)

むかしの日野川は魚がーぱい泳いでいた。あゆ・

ふな・こい・うぐい。なまず・ハツ目うなぎ…。

清松つつあんの呼びかけで、子供たちは手に手

に番線(太い針金)を持って川の中へ入って行った。

日野川の流れば急やったけど、みんな泳ぎがうま

かった。番線で川の中のをあゆをたたくと、あゆは

腹を見せて裏返りになって浮いてきた。手でつか

んで、親指のつめでうす腹のところをちよつと破

って、ごんど(ないぞう)を出してしまうと苦い



ところも出てしももつた。

あゆに塩をふって、たき火でじかに焼いて食った。うまかったぞ。

また、川の堤防に使われたじゃかこの破れた所に魚のうろ(すみ家)があつて、いけいもんは川の中へもぐって行って、大きなうぐいをヤスで刺してきて食わせてくれた。

(遊び その二)

日野川の水はあたたかく、いくら泳いでいても口びるが紫色になることはなかった。煮物が炊き上がると、大きな鉄なべはいろりの外へ下ろされた。といきび(とうもろこし)は、火のつぼん中(まん中)に入れて焼いた。魚はいろりの回りで焼いた。

「早よ食え、煮えたんやで。」
と清松つつあんに言われて、カヤのばい(棒)で作った箸でちっくり刺いて食った。

「こりや、南瓜 ちよっと あもねいなあ。」

「こりや、すまし(しょうゆ)が多過ぎてくどいなあ アハハ八……………」

と、大さわぎしながら食った。腹一ぱい食った。塩ゆでしたはじき豆は、一本ずつ分けてもろうて食った。うまかったぞ!

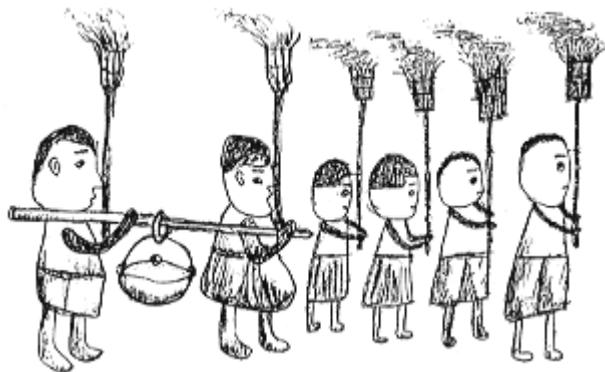
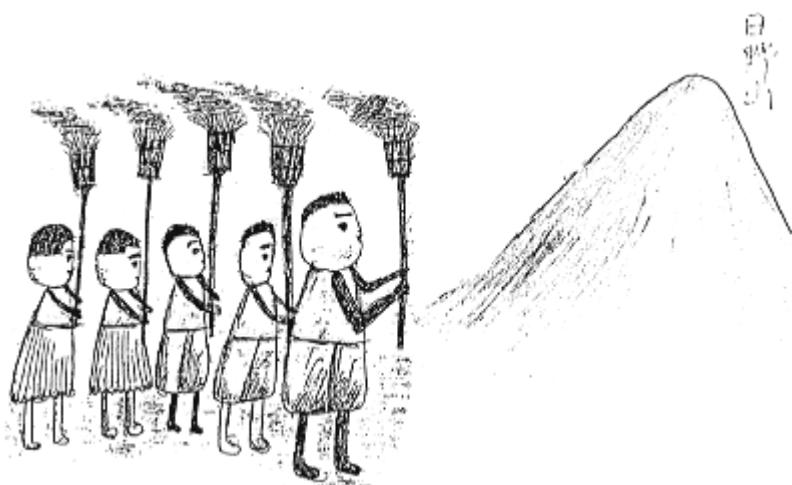
食べあきると、砂を手で掘って横になり、足から砂をかけて頭だけを出して寝た。太陽で砂が焼けていて心地よかつた。

河原の石も熱くなっていた。石の上に腹ばいになって背中を焼いたり、みんなすっぱだかで泳いだり遊んだりした。

食いたいときに行つては食い、食つてしまつと、また、遊び……………。

火 進 上

夜の八時ごろ、日野山にぼつと明るい火(祭りのかがり火)がともつた。



田んぼ道で何本ものたいまつを振り回す
ことは害虫取りの役目も果たした。

「ほうら、火があがつたぞう。」

「早や、もう帰らな、あかんのか。」

清松つつあんが、

「火をつけッ。」

と言うと、みんなはいろりの残り火を花火のよう
にけり上げてたいまつに火をつけた。

暗い夜空に赤々とたいまつたいまつの火が燃えて、河原
は昼のように明るくなった。

「火進上、火進上、御嶽山（日野山）に火進上、
火進上。」

「火進上、火進上、御嶽山に火進上、ためぎのき
んたま、つき破れ。」

と、子どもたちは大声を張り上げて、たいまつを
ぐるぐる回しながら氣勢を上げた。

暗がりの中を、たいまつをふりふり河原を駆け
抜けて、その明かりをたよりに細い田んぼ道を家
路についた。おなかもふくれたし、よう遊んだし、

ほんとに楽しかったな。